

渡してやっと動かすことができました。

敗戦、弱身に付け込む中国軍掌や停車場係、私は腹を据えかね経理将校と一緒に、上海の管理官にこのことをぶちまけた。すると、早速手を回して、毛布は返らなかつたが、お金は返ってきた。こちらはその金で牛の缶詰を買って皆に分けた。

上陸した港で、切符と二〇〇円だけをもらって下呂へ帰ったが、岐阜で腹が空いたので、その牛缶を食べていた人が集まってきた。内地も随分食糧がなくて、牛缶が珍しかったのでしょう。下呂へ帰り着いたのが五月ごろなので、桑畑の緑、喜んで駅近くの祖母に挨拶にいったら死んでいた。親戚の年寄りも二人死んでいた。わずかに三年の間に日本も変わった、家族も変わった、復員の喜びも悲しみに一変してしまいました。

砲兵第百四連隊（鳳）

湘桂作戦・馬・マラリヤ

静岡県 河野 政信

私は大正十一年生まれ、昭和十七年徴集で、十八年に入営しました。所属したのは第百四師団の野砲百四連隊で、広東の西江岸の三水県に駐屯して、歩兵第百八連隊に一個中隊配属され、山砲二門です。

古參兵は関西の人たちでした。大東亜戦で香港攻略の時、現役少年兵が、佐野部隊（第三十八師団一沼）へ転属したので、その欠員名古屋師団補充の兵隊が鳳兵団へ入ったと聞いていました。だから、十七年ごろから、愛知・岐阜・静岡の人が主力になったのです。

苦勞という、私たちは恐らく一番でしょう。馬に砲に、それに弾薬があった。食糧・馬糧もあったでしょう。恐らく空襲の時には駄馬。山また山なので鞍馬ではできない。

それこそ兎の道よりちょっとましぐらいの道を峠を越えるわけだから、わしは砲手だけど馭者が足りなけりや砲手が馬を曳く。

私は馬ばかり三頭殺している。恐らく二頭は不注意です。一頭は、何せ空襲の時に馬は臆病で、手綱を放すとみな跳んじやって、一か所にかたまる。それを機関銃掃射でやられるからね。他の馬が跳びだしたら、怖がるからみなかたまる習性なのです。

湘桂作戦は十九年九月からですが、その前に北の方へ行った。北へ行ったときかな。月ははっきり判らないが（北江作戦）馬では苦勞した。訓練の時は野砲と山砲だが、作戦の時は山砲です。

だから、自分の馬がやられるとか、鞍傷で動けなくなつた場合には、砲手と馭者で三二貫（二二〇キ）ある砲を、山の急坂を二人で担いで登る。私は身体が小さいから前だ、その時の苦勞といつたら、とても一口や二口ではない。筆舌に尽くし難いというわけだ。

そこで、歩兵が小休止する。前の方が小休止、山砲の場合は指揮班小隊（観測班）が一番前にいる、すると「や

れやれ小休止か」といって歩兵は土手へドッカー腰を下して休める。私等は先ず第一に馬に水をくれなきゃならない。ついた途端に川を探して水をやり、飲んだか飲まないうちに「出発準備」です。

それでも馬は利口で可愛い。一番はじめ湘桂作戦に出たとき、あてがわれた馬にどんなに助けられたか分らない。馬が何というか、人間の言葉が分るといふか何かね。小さい川なんか渡るでしょう、そういうときには馬が頭を下げてくれる。私はそこに跳びつくんですよ。そうすると、スイスイ、私は足を一寸上げていけば足は何も濡れない。

ところが、そうでなければ手綱を引っ張って行かねばならない。すると足はグチャグチャになって足の皮がフヤケてきれいにむけてしまう。夕方、宿泊地に着いて寝るとき、一人で起きて、川とかから水を汲んで足を冷やす。そうでないと翌朝、歩き始めなんているのは全然歩けないのですよ。足がふやけてむくれちゃっているでしょう。

三水を出て、北江作戦（湘桂作戦）と号作戦第一期）

をやつて、第二期の作戦で、梧州攻略途中でマリアに
かかった。

はじめの二、三日間は、中隊長は自分の馬に私を乗せ
てくれたが、落ちてしまうので私を鞍に縛り付けた。そ
れでも駄目というので、苦力二人で担架を作ってそれに
乗せてくれた。それでも回復しない。

中隊長は、「お前を連れていきたいのは山々だけど、
お前を連れていくと、これだけの苦力がお前を担いでい
かなきゃならないから、衛生隊が来た時に、お前を衛生
隊へ預ける。」「自分は体が弱くて落胆したんじゃない
で、他の者より余分に働いたのだと思つて、ゆっくり養
生してこい。」と言われました。中隊長は平田淳治中尉
で、二、三年前に亡くなつたが、今考えてみればあの人
が庇つてくれたからだなあと思うものね。

それから一番心に残っているのは、マリアで動けな
くなって、頭の毛なんか、きれいに抜けちゃつて、西江
を民船を使って下ってくるのに空襲でやられる。動ける
連中は船から全部逃げてしまふが、私は動けないから
「どっちみち俺は此処で死ぬんだからいいや」つてね。

そのときの衛生軍曹が忘れられない。島田軍曹が指揮官
だったので。「河野、河野」と呼んでるけど、わしゃ
返事できないですよ。私は寝たきりだから、小便でも何
でもタレ流し、寝糞の上に、だからそれこそ瘦せこけて
本当に骨と皮ばっか、頭の毛なんか一本も無かつたしね。
だけれど私はその時、自分がそんな姿になっているなん
て気が付かなかつたですよ。広東へ着くまでは自分は普
通だと思つていたから。

島田軍曹が呼んでいる。返事をしたくてもできない。
自分では聞こえなければ、声も大きく出ないし、寝てた
ですよ。そうしたらようようそこまで捜し当ててくれた。
私は「いいですよ、自分はもう助からないと思つから」
と言つたら「馬鹿ものこで死んだら犬死だ」。そうし
てわしを背負つてくれて船の上へ上がつて、近くに甘藷
畑が一ぱいあつたですよ、そのなかに寝かせ「いいか、
動くんじゃないぞ」と、言つて何処かへいっちゃつたん
ですよ。

約半日、炎天のところを仰向けに寝て、喉も渴いた。
水も呑みたいけど、だれ一人呼ぶこともできない。そこ

で、「俺死んだら家の奴、なんと言うべい」など、そんなこと考えたかね。そうしたら、もうすぐ日が暮れるなあと思った。「歩調取れ」なんて号令をかけ、ぞろぞろみなが来てくれた。そして、また船に乗せられ一週間ぐらいで広東へ着いたかね。

広東へ着いたら、負傷兵は手当してくれ、広東陸軍病院で私は一番先に降ろされ、一番奥の所に置かされた。だけど船降ろされるとき全部脱がされ、毛布一枚ですよ。色の白い衛生兵や慰問団とかがそのところを歩いているのですよ。

まもなく、広東から香港へ行ったけど、九竜へ転院です。見たら誰もいない、ここへ置かれるのかなと思っていいたら、しばらくして衛生兵に「いたいた」と持っていたら、何せ毛布一枚、隠すものなしの素っ裸、禪と白衣を着せてもらって、三日ばかりしたら居留民の国防婦人会の人が慰問にくれた。前線から帰ってきたというので。

九竜から原隊に戻り海豊へ行ったら、部隊は米軍の上陸に備えるため洞窟で陣地構築中でした。隊では、私は

死んだことになっていました。ですから配属された百八連隊がどこにいたか分からなかったです。

帰りは、黄甫から浦賀へ着いたが、コレラで港に停泊して、昭和二十一年四月に復員しました。

帰ってみれば天涯孤独

福岡県 鬼塚 国 男

私は大正十年生まれで、兵隊検査では第二乙種で、昭和十七年二月一日に、臨時召集をされ、歩兵第十三連隊補充隊に入りました。二十三日に熊本陸軍病院に転属となり、一期の教育を受けたんです。

入隊する時の私は家庭は母と兄と兄嫁の四人で、父は私が生まれる一寸前亡くなっておりませう。兄は私と違って兵隊向きの男でして、現役で中支に行き一度家に帰ってきましたが、私の入隊後、再度召集で南方へ行き、戦後の二十一年の暮に、「フィリピンで戦死」の公報がきました。階級は曹長でしたから、下士官候補志願では